# 姉と友人を攻略しちゃったみほちゃんの話

グレート・G

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

姉西住まほと友人逸見エリカ。

この二人ともっと仲良くなりたいみほが頼りにしたのは、沙織から借りた一冊の本。

その本の内容を鵜呑みにしちゃったみほが、結果的に二人を堕としてしまう。

# 目　次

姉と友人を攻略しちゃったみほの話、その1 ―― 1
まほとの一日 ―― 12
エリカとの一日 ―― 18
姉と友人を攻略しちゃったみほちゃんの話、終 ―― 25

# 姉と友人を攻略しちゃったみほの話、その1

「本当に、申し開きもございません」
　すみませんでした、と土下座で謝っているのは西住家の次女、西住みほ。
「・・・・・・」
　二人掛けのソファに腰かけ、そんなみほに絶対零度の視線を送る人物が二人。
「私はみほに浮気されたことを悲しめばいいのか、それとも大切な後輩が傷ものにされたことを怒ればいいのか、どっちだと思う？」
　一人は、ゆったりとした普段着に身を包んだ西住家の長女にしてみほの姉、西住まほ。
「ねえみほ、私に言ったわよね・・・・・浮気はしてないって。　なのになんで、しかも寄りによって隊長と二股架けるなんてどういうつもりなのかしら？」
　一人は、私服でみほを睨みつけている、彼女の元副官でありルームメイトであり、現友人でもある、逸見エリカ。
　二人の戦車の装甲すら貫通するのではないかという視線に晒されながら、みほは何とか弁解を試みようと顔を上げた。
（あ、これはダメな奴だ）
　そして、心の底から後悔した。
　二人の声色は努めて冷静になろうとしているのが解る。
　しかし、その表情は共通していた。
　泣いているのだ、静かに。
　静かに、静かに泣いているのである。
　強い姉と強い友人、この二人のガチ泣きを直視してしまったみほは、ただひたすらに額をフローリングの床にこすりつける事しかできなかったのである。
（二人とも、泣くときは静かに泣くなんて意外だなあ）
　一周回って冷静になった頭でそんなことを考えるみほ。
　そんなみほをしり目に、まほとエリカの話は続く。

「確かに、私は・・・・・・みほの恋人としても姉としても失格だ、浮気をされてもしょうがないと思っているよ」
「お姉ちゃん、いや、まほさんそれは違うよ！」
「いいんだ、みほ。　これは天罰だと思って身を引くよ・・・・・・」
「私さ、貴女にとっていい女じゃなかったと思うわ・・・・・・常にあなたにつらく当たってたもの」
「あの、その、エリカ、違うの・・・・・・」
「だから、その、いいのよ私の事なんて」
　まほは涙を流し、それでもなおみほに微笑みながら身を引こうとし。
　エリカは自身の行ってきたことを後悔し、そしてやはり身を引こうとしている。
　しどろもどろになりながらも、何とか弁解をしようと口を開くが、みほの口から出てくるのは要領を得ない言葉だけ。
（どうしてこうなっちゃったんだろう・・・・・・）
　泣きたい気分になりながらも、みほは己の行動をもう一度思い返してみることにした。
　現実逃避ともいう。
　ケース1、西住まほの場合
「あっ、やめ、こらっ・・・・・・みほっ！」
「んー、お姉ちゃんの弱点はうなじかな？」
「ひゃん!?」
　学園艦の寄港地が同じ日、西住みほは自身の姉である西住まほと久しぶりにじゃれ合っていた。
　まほをあすなろ抱きに後ろから抱きしめ、そのうなじに顔を埋めてしきりとじゃれついているみほ。
　うなじや首筋にみほの息や髪が当たり、それがまほに悩ましい嬌声を上げさせているのだが、当のみほは全然気が付いていない。
　それどころか、嬌声を上げ、身をよじるまほを面白がって更に攻めるというまほにとっては悪循環に陥っていた。
「みほっ、いい加減にしないと怒る・・・・・・んっ」

「お姉ちゃんの首筋、ちょっとしょっぱいね・・・・・・・・ぺろっ」
「みっ、みほっ!?」
(沙織さんから借りた本には、こう書いてあったんだけど・・・・・・おかしいな?)
どうやら、一連の行動は大洗におけるみほの親友の一人、武部沙織から借りた本によるものらしい。
事の発端は、みほが姉妹間に若干の距離が生まれてしまった事への対処を相談したことだった。
ただ、みほが恥ずかしがって物事をストレートに言えなかったため、沙織はみほの言った事を曲解した。
その結果渡された参考書が「意中の相手を堕とす１００の方法」であった。
そして、みほは沙織を疑うことなく、躊躇することなく１００の方法を実行に移したのである。
右手でまほの両手を緩やかに塞ぎつつ、左手はまほのお腹をさすり、まほの項や耳を的確に唇と舌で攻め上げる。
「ひぁっ!」
「んふふ、お姉ちゃん、かわいい」
「あう」
まほの耳やうなじは真っ赤に染まっており、彼女の羞恥心が限界に達しようとしている事の証左となっている。
更には、先ほどから嫌がっているそぶりをしてはいるモノの、まほが本気を出せばこの状況を振り払う事はすぐにできてしまう。
しかし、それをしないという事はまほ自身、本心では期待をしている事に他ならない。
だが、みほは攻撃の手を緩める様な事はしない。
そしてそれは、まほにとって生殺しの時間がさらに増えるという事に他ならない。
「お姉ちゃん・・・・・・んちゅっ」
「んくっ!?　なっ何をしたんだみほっ」
「別に、ただキスマークを付けただけだけど?」

「きっ・・・・・・」
勿論、みほからすれば「意中の相手を堕とす１００の方法」を実践しているにすぎない。
だが、まほの理性は確実にボロボロになっていた。
（みほは妹、みほは妹、みほは妹、みほは妹）
念仏のように「みほは妹」と唱えなければそのまま襲い掛かってしまいそうな、そんなまほの事をあざ笑うかのように、みほは最後の止めを刺した。
「ね、私にも付けて欲しいなキスマーク・・・・・・ね、《まほ》」
「うぐぅっ!?」
耳元で甘くささやかれたその言葉は、まほの理性をたやすく打ち壊した。
「みほ」
「ん、何まほ」
「みほのせいだからな・・・・・・覚悟しておきなさい」
「ふぇ？」
まほはみほの腕の中で身をよじらせて正面を向く。
いきなりのまほの行動に、みほは驚き一瞬固まる。
その隙を見逃す西住流長姉ではない。
「んっ！」
「んむっ!?」
まほはみほの唇を強引に奪うと、舌を絡めるディープキスをし始めた。
みほは初めこそ驚いていたが、しかし、少しの間をおいて彼女の背中に手を回し始める。
それと同時に、まほもみほの背中に手を回してより深くキスをする。
まほはみほに自身の唾液を流しこみ、みほはそれを嬉しそうに飲み干してゆく。
まほの唾液をたっぷりと味わったみほは、逆にまほに対して自身の唾液を送りこむ。

まほもまた、みほからの唾液を一滴残らず飲み干さんとして、息が続かなくなった。
「ぷぁっ」
「ぷはっ」
結果、唾液の橋が「つぅ」とお互いの口元から延びてプツリと切れてしまった。
「はぁ、はぁ、はぁ、みほ、私、もう・・・・・・」
息も絶え絶えに、そして、鼻息は荒く。
発情しきった雌のフェロモンを周囲にまき散らしながら、まほはみほに許可を求める。
本当は襲い掛かってしまいたいのだろうが、そこは西住流の精神鍛錬のたまものか、まほはただ襲い掛かるという事を良しとしなかった。
正々堂々、真正面から。
西住流の体現と言えるだろう。
「うふふ、まほはもう我慢できないんだね・・・・・・いいよ、おいで」
「うあぁ、みほ・・・・・・みほぉっ！」
尤も、そんな精神も、蕩け切って淫魔の如く妖しい笑みを浮かべたみほの前では何ら役に立たなかったのであるが。
正に、発情しきった犬の如き勢いでみほに襲い掛かったまほは、みほの部屋着をまくり上げ、純白のブラジャーに手をかけた。
そして――――――
（あの時の必死なまほ、可愛かったなあ）
土下座している最中だというのに、みほの頬はまほとの情事を思い出して少しにやけていた。
（そういえば、エリカさんともやっちゃったなあ）
ニマニマと顔も内心も笑いながら、みほは更に思考を加速させてゆく。
ケース2、逸見エリカの場合
「みほ、アンタねぇ」
「ん、なあにエリカさん」

「ご飯の準備してるときに、危ないでしょ」
離れなさい、とエリカは言った。
「その申請を却下します～」
尤も、みほはそんな言う事を聞くような娘ではなかったが。
「アンタって娘は・・・・・・」
エリカは溜息を一つつくと、腰に回されたみほの腕を解くために、材料をまな板の上に置いた。
今、エリカがいる所は黒森峰の学生寮ではなく、みほの学生寮である。
次期隊長として、大洗との練習試合の打ち合わせに来ていたエリカだったが、夜も遅くなってしまった。
その結果、みほから自分の部屋に泊まってはどうかという申し出を受けて、エリカも渋々とそれを了承した。
みほの普段の食生活（コンビニ弁当オンリー）を聞いたエリカが、部屋の台所を借りて料理を作ろうとしていた。
（なんか新婚さんみたいじゃない）
なんて事を考えながらエリカは、外見は仕方がないという風に、内面は喜々として、夕食を作るためにボコエプロンを身に着けて台所に立ったのである。
それは、他でもないみほによって中断させられていたのだが。
そんなエリカは腰に手を回され、背中に顔を押し付けられるという状況に陥っていた。
（大丈夫、私の心臓がやばい事になっているのは気のせいなんだから！）
頬が赤く染まり、耳も赤くなっているが、それでも気丈に振る舞うエリカ。
見るものが見れば、無理をしているのがまるわかりである。
「ってちょっと、みほ！」
「ん・・・・・・なぁにエリカさん」
「アンタどこ触ってんのよ！」
「エリカさんの太ももに決まってるじゃないですか」

「その手を退けなさい！」
「やです！」
そう言ってみほは更にすりすりとエリカの太ももに手を這わせる。
（いや、ちょっと何やってんのこの子はっ！）
心臓が１６ｂｅａｔを叩き出しているのを感じながら、エリカは何とかみほを引きはがそうとする。
だが、みほはどうという事は無いとでもいう風に、エリカの腰に右手を回し、背中に顔を押し付け、左手で太ももを堪能していた。
「んっ、やっ、止めなさいってばぁっ！」
「それじゃあ、力ずくで止めればいいじゃないですか・・・・・・エリカさんの方が力強いんだから」
「そっそれは・・・・・・あんっ!?」
太ももからおしりのラインに手を這わせるみほ。
完全な事案である。
とは言え、エリカもエリカで手が出せない。
惚れた弱みという奴だった。
「みほ、ご飯の準備ができないから・・・・・・ね？」
「ねえ、エリカさん・・・・・・エリカさんは気が付いてる？」
「え・・・・・・気が付てるって、何をよ」
「やっぱり気が付いてなかったんだね」
（確か、本の内容だと此処からが本番だったよね）
武部沙織の渡した「意中の相手を堕とす１００の方法」は未だに継続中であった。
「私、エリカさんが食べたいな」
「へぁっ!?」
みほはエリカの耳元に口を寄せると、思いっきり甘い声で言った。
エリカの顔は今度こそ真っ赤に染まり、耳もうなじも赤く染まっている。
（食べたいって・・・・・・そういう事、よね!?）
エリカとてその手の知識に疎いというわけではない。
しかし、意中の相手に、しかもこんなシチュエーションで言われる

とは思ってもみなかった。
　みほの放った心理的電撃戦は、見事にエリカの心の本陣を陥落せしめたのである。
　勿論、みほは「意中の相手を堕とす１００の方法」に基づいてやっているだけであり、他意は無い。
　更に言えば、この方法が二人の仲をより良いものにするという風に考えているので悪気もそんなにない。
　正に、小悪魔の所業である。
「みほ・・・・・・本当にいいの？」
　みほの正面に向き直り、その目を見ながらエリカは問う。
　それは最終確認であり、彼女の率直な気持ちでもあった。
「エリカさんなら、いいよ？」
　そういうとみほはエリカの腰と頭に手を回し、そして。
「ん・・・・・・ちゅ」
「んぷっ」
　キスをした。
　それもただのキスではなく、ディープキスだ。
　くちゅ、くちゅ、と舌を絡め合う音が響き渡る。
　お互いが十二分にお互いを堪能したとき、二人は唇を離した。
「ねえ、エリカさんベッドに行こう？」
「ええ、いいわよ」
　普段の意地っ張りなエリカからは考え付かないような、素直な言葉。
　素直な自分に内心驚きつつ、しかし、エリカは止まらない。
　エプロンを脱ぎ捨てて、ベッドにお互いに腰かけて、ついばむようなキスをしながらお互いの制服を脱がしてゆく。
「みほ？」
「なに、エリカさん」
「その・・・・・・浮気は嫌よ？」
「ふふっ、しないよ」
「そう・・・・・・んっ」

「んむっ」
お互いがキスをしながら、脱ぎ捨てた制服の上に倒れこむ。
制服がくしゃりと歪み、ベッドが軋む。
そして二人はそのまま――――――。

（あの時のエリカさん、可愛かったなぁ）
エリカとの情事を思い出すみほ。
その顔はだらしなく緩んでいた。

ケース3、西住みほの場合
「・・・・・・ほ、みほ！」
「はぁ、いいから顔を上げなさいよアンタ」
土下座のまま、ある程度時間がたっていたのでしょうか？
私の名前を呼んでくれるお姉ちゃんとエリカさん。
緩んでいた表情筋を引き締めて顔を上げると、何かをもって呆れた表情をしている二人と目が合いました。
って、あれは。
「沙織さんから借りた本、どうして？」
「成程、あんこうの通信手が今回の元凶か？」
「もしくはこの本の内容を読み込んだみほのせい、でしょうね」
そう言ってあきれた表情を浮かべるエリカさん。
お姉ちゃん・・・・・・ううん、まほも同じような表情を浮かべています。
「ざっとでいいんだけど、理由を教えてくれない？」
「え、う、うん」
先程の絶対零度から一転、なんだか疲れたというか、呆れている彼女達。
そんな二人に、私は説明を始めました。

---

「「はぁぁぁっ」」
私の説明を聞いて、二人はおおきなため息をはきました。

何故？
「我が妹ながら呆れたというか・・・・・・すまない、エリカ」
「いえ、隊長、その、乗った私も悪いと思うので、ええ」
どうやら二人は、私が本の内容を鵜呑みにして二人と仲良くなろうと行動してしまった事に呆れているようでした。
「とは言え我々もこの本の内容を鵜呑みにしてしまうかもしれないな、エリカ」
「そうですね隊長、私もなぜかそう思います」
世間話でもするように、二人はそういうとニコリと微笑みました。
「その、ずっと話しっぱなしだったし、お茶を入れるね！」
なんだか嫌な予感がするので、私は立ち上がるとキッチンにお茶を入れに行きます。
余りにも稚拙な、でも精一杯の私の回避行動。
でも。
「まあ待て、みほ」
「そうよ、別に私達のど乾いてないし・・・・・・ね？」
立ち上がって後ろを向いた瞬間、まほとエリカさんにがっしりと肩を掴まれました。
その手は優しくて、でも決して放してくれない気がします。
「あの、お姉ちゃん・・・・・エリカさん・・・・・ごめんなさい・・・・・」
「ほう、何を謝っているのか・・・・・・エリカは見当がつくか？」
「いえいえ、みほがどうして謝っているかの理由なんて皆目見当もつきませんねぇ」
「いや、二人とも解って・・・・・・ひゃん!?」
両耳に触れる、柔らかくて熱い感触。
ううん、熱く感じてしまったのは、私自身の顔が熱くなっているからに他ならない。
まほに胸を、エリカさんにお尻を、鷲掴みにされた上で両耳にキスをされるという事。
そして器用にも、二人がいま私の着ている部屋着を脱がそうと、空いた片方の手でしていることも。

この事態に私の頭の中はグルグル回るだけでどうにもなりません。
こんな時、本の内容ではどうしてたっけ？
よくよく二人の様子を横目で観察してみると、二人とも目をギラギラさせて吐く息は荒く、その、私を欲しがっているのがすごくよく解ります。
解っちゃいます。
そして、二人が一体どんな言葉を欲しているかも。
そこで私は精一杯の愛情と二人への謝罪の気持ちを込めた一言を言いました。
「や、優しくして・・・・・・・ね？」
『『・・・・・・ッツ』』
私の言葉に、まほもエリカも理性の糸が切れてしまったようでした。
その結果私は、二人にベッドに押し倒されて、そして――――――。
その後、私に二人の彼女が出来ました。
一人はまほ、一人はエリカ。
共に私にとって大切な人で、今私はとっても幸せです！
ただ、これってどう考えても二股なような気がする、そう言ったら二人とも顔を赤くして
「二人じゃないと持たない」って言うんです。
何故なんでしょうか？

# まほとの一日

「意中の相手を堕とす１００の方法」事件から時間がたったある日の事。

みほの自室にはまほが来ていた。

別に彼女が来ること自体は（練習試合の申し込み等）あまりおかしい事ではない。

ただ、その頻度がかなり多い物だったのである。

「ちゅっ・・・・・・毎月のように来られると私も困るよ？」

「そっ、そうか・・・・・・」

「だから少しは我慢してね、まほ」

「んっ、善処はするが・・・・・・我慢できそうにないかもしれない」

みほの自室のソファにて啄むようなキスをされながら、まほは言う。

二人は今、覆いかぶさるようにしてソファに横になっている。

まほが下でみほが上、みほがまほにキスの雨を降らせていた。

みほからのキスを、まほは喜々として受け入れており、退く気は全くないようだ。

キスと共に胸元にキスマークがつくが、まほは気にした様子が全くない。

むしろみほから与えられたそれを、どこまでも愛おしそうにしている。

「まほって、そんなに我慢できない子だっけ？」

「ふふ、今までずっと我慢してきた、その反動だ」

みほが上から退くと、まほもそれを追うように起き上がる。

みほの腰に手を回して上体を起き上がらせると同時に彼女の胸に顔を埋めた。

「まほ、甘えん坊になってない？」

「反動だって言っただろう？　ずっとこうしたかったんだ」

「・・・・・・えっち」

「みほがそれを言うの？」

まほはみほの胸に顔をうずめたまま上目遣いで言う。
そんなまほの頭を撫でながら、みほは笑った。
「・・・・・・あ、でもこれじゃあコーヒー淹れられないからちょっとどいてね？」
「む、そうか・・・・・・・仕方ないか」
そう言うとまほは今度こそ体を離した。
その際、みほの胸から顔を離す際に心底残念そうな顔をしたのを、みほは見逃さなかった。
「大丈夫だよ、まほ」
「みほ？」
「ホントにすぐ戻って来るから」
「・・・・・・ああ」
最後までみほの手を掴んでいたまほだったが、それをみほがやんわりと外してコーヒーを入れにキッチンへ行った。
「さて、私も服を着ないと・・・・・・」
まほは、ソファの近くに脱ぎ散らかしてある衣類を見て、渋い顔になった。
「何というか・・・・・・盛りの付いた犬より質が悪いわ・・・・・・みほ断ちも検討するべきかしら・・・・・・」
みほに伝えるべきことがあるのに、とブツブツ独り言を言い始めるまほ。
とは言え、そんな事を言いつつキチンと制服を着ているあたりが彼女らしい。
シャツのボタンをきっちり留めたその時。
「まほ、お待たせ」
「ああ、みほ・・・・・・・っ」
みほが両手にコーヒーの入ったマグカップを持って現れた。
問題はその恰好だ。
そう、制服は脱ぎ散らかされているからまほのすぐそばにある。
裸のみほはどうしたか。
ボコのエプロンで前だけを隠した「裸エプロン」状態でまほの前に

現れたのである。
やっている本人も恥ずかしいのか、頬を赤らめている。
「・・・・・・何か反応してよ、まほ」
これ結構恥ずかしいんだよ、と言いながらもテーブルにマグカップを置くみほ。
まほの立ち位置からだと、エプロンの間にある谷間と桃色の突起が丸見えであり、それがまほの体を固くする原因となっていた。
（このままだと、また押し倒してしまいそうで・・・・・・）
先程みほ断ちをすることも検討すると言ってしまった手前、それを反故にするのは抵抗があった。
だが、何よりもだ。
「このままだと、本当に盛りの付いた犬になってしまう・・・・・・」
「ん？　何か言った、まほ」
「い、いや何でもない」
つい先ほどまでしていたのだから、といういわゆる賢者タイムな思考のおかげでみほに襲い掛からずに済んだまほ。
「みほ、貴女も早く服を着なさい」
そう言って、落ちていた服をかき集めるとみほに押し付けた。
「もう・・・・・・私は気にしないよ？」
「私が気になるんだ」
まほはそう言うと、みほに背を向けてスカートを履き出した。
そんな姉の様子を見てみほはクスリと笑うと、脱ぎっぱなしであった制服を着るためにエプロンの紐をほどく。
（衣擦れの音が、悩ましい・・・・・・・堪えなさい、私の理性！）
スカートを履き終わり、後ろを向き続けたまほは、みほの着替えの音に敏感に反応してしまい、悶々とした一瞬を過ごすこととなる。
長きにわたる一瞬が終わり、みほの「こっち向いていいよ」という声で、まほは振り返る。
振り返った先には、きちんと制服を着こなしたみほの姿があった。
「変な所で律儀なんだから、まほは」
「・・・・・・・そうか」

本当は襲い掛かりたかった等、口が裂けても言えないと思うまほであった。

少し温くなった珈琲を飲みながら、みほとまほは向かい合いしばらく黙ったままであった。

気まずさはなく、ただ穏やかでゆっくりとした時間の流れの中に身を置いている。

そんな二人の様子は、どこか老夫婦を感じさせるものであった。

そのような雰囲気をあえて壊して、まほは話を切り出した。

「・・・・・・なあ、みほ」

「なあに、まほ」

「私がドイツに留学しても、その、大丈夫か？」

「・・・・・・大丈夫、とは言えないかも」

「よかった、寂しがってくれるか」

「むぅ、どうしてそういう事言うの」

安堵のため息をつくまほに、むっとした表情でみほは聞き返した。

その表情は「私怒ってます」というのが丸わかりだ。

頬をぷっくりと膨らませているみほを微笑ましい物を見るように見ながら、まほは口を開く。

「何、私がドイツに留学するという事は、みほはエリカと二人っきりになるだろう？　そしたら私の居場所なんてすぐに無くなってしまうんじゃないかと思ってな」

まあそうなってもいいとは思うんだが、と慌てたようにまほはそう続けた。

まほの不安は尤もであった。

せっかく恋人同士になったのに、恋人らしいことが余りできない内にドイツへと留学することが決定してしまったのだ、本人の心中は憤懣やるせないだろう。

だが、みほはそう考えてはいなかった。

「まほはそう言うけど、私はそうは思わないよ」

「何故、そう言える？」

「だって・・・・・私の隣はまほが帰ってくるところだもの」
みほはまるで聖母のような微笑みを浮かべ、言った。
その言葉を聞いたまほは、まるで雷に打たれたかのように目を見開き、暫しの間息をすることすら忘れてしまったかのようにみほの顔を凝視した。
流石のみほも、凝視し続けることに耐えられなくなったのか、つい、と顔を逸らしてしまう。
その耳は赤く染まり、彼女自身その内心が大いに恥ずかしがっているという事がまほには解った。
そんなみほの表情に、仕草に、まほは魅了されてしまっている。
それほどまでに、今のみほには魔性があった。
みほ本人が無自覚だとしても、まほにはまるで自分を堕としつくすために生まれた魔性の女のように思えてしまった。
「みほ、やっぱりだめだ」
「ふぇ?」
そしてみほの言葉は、まほの理性や内に秘めた思いを容易く打ち砕いてしまう。
静かに立ち上がりみほの隣に座ったまほは、そのまま彼女を強く抱きしめ唇を奪う。
驚くみほは抵抗らしい抵抗も出来ぬままに、電撃戦で蹂躙されるように口内をまほの舌で犯される。
だが、彼女は決して嫌がっていたわけではなかった。
それくらい乱暴で、しかし、まほの持てる全ての愛がこもったディープキスであった。
「みほ、私は必ずみほの元に帰ってくる」
戦車道もそうだが、人として、お前に釣り合う女になって必ず戻る。
まほは臆面もなくそう言うと、再度みほの唇を奪う。
熱く、深く、みほの全てを包み込むようなキス。
みほはうっとりとした表情になった。
それは、まほがみほの心を本当の意味で堕とした瞬間でもあった。
ここで二人は、結ばれたのだ。

「みほ、私は今ここでしたい」
「ついさっきもお互いにヤったと思うけど？」
「そんなんじゃない、お前を愛したい、みほの全てを愛したいんだ」
「・・・・・・試合の取り決めとかはどうするの？」
「明日は日曜日だ、どうとでもなるさ」
　みほの制服を再度脱がしながら、まほは事も無げにそう言った。
（エリカ、本当はお前にみほを譲るつもりだった）
　まほの下で嬌声を上げるみほを見ながら、彼女は思いをエリカへと巡らせる。
（だが、止めた。　お前にはやらん、みほは私のものだ・・・・・私だけのものだ！）
　キスをして、歯型を着けて、キスマークを体中に落とす。
　みほという名のキャンバスに、まほは自身のサインを入れるかのように、自身で塗りつぶしていくかのように、夢中になってその行為を行った。
　道ならぬ道に堕ちた姉妹の嬌声は、日が落ちてもなお部屋の中に響き続けたのだった。

# エリカとの一日

みほの部屋に何かと理由をつけてエリカは訪れるようになった。
それは、次期隊長として隊長の心構えを知りたいだとか、貴女の食生活が心配だからご飯を作りに来ただけとか、そういう理由だ。
勿論、ただ来るだけではなく、時折ではあるが泊まりに来ることもある。
今日は、いわばその泊まりに来た日だった。
勿論、まほとの紳士協定ならぬ淑女協定によりお互いの日程が被る事は無い。
みほの部屋に泊まれることを内心喜んでいたエリカは、そこで違和感を感じ取った。
（何かしら、こののどに刺さった魚の骨みたいな違和感・・・・・・）
エリカがみほの部屋に入った時感じたのは、猛烈な違和感であった。
否、違和感ならばみほに会った時からすでに感じていた。
何となく、だが「みほから何かが漂っている」のである。
漂っていると言っても、何が、と言い現わすことが出来ない。
そのもどかしさを飲み下して、エリカは無理やり笑顔を作った。
「来れて嬉しいわ、みほ」
「ふふっ、随分素直になっちゃったね、エリカさん」
「あら、素直な私は嫌い？」
「いじわるな言い方・・・・・・そういう事を言うエリカさんは嫌いです」
みほがエリカの無理やりな笑顔に気が付くこともなく、彼女達はいつも通りのやり取りを交わす。
その言葉のやり取りからも、エリカは何かを感じ取っていた。
（何、この違和感・・・・・・・）
みほと話しているというのに、彼女が何か別人のような気がして、エリカは心底気味が悪くなった。
（いえ、落ち着きなさい、私。　戦車道の試合と同じ、落ち着いて違和

感を探すのよ）
次期隊長として培ってきた観察眼と頭脳を総動員して、みほから感じる違和感の正体を探ろうとした。
そして、その違和感は思っていた以上に早くに見つけることが出来た。
みほの言葉と表情が合っていない。
エリカは違和感の正体にようやく気が付いた。
みほは感情が案外顔に出やすい。
戦車道をしているとき以外は、子供っぽく表情が変わる。
だが、エリカと話しているとき、その表情の移り変わりが無かったのである。
更に、みほから漂う気配の違和感も突き止めることが出来た。
みほから漂う気配は「喜」一色だったからだ。
「ねえ、みほ」
「ん、なあにエリカさん」
「貴女、何かいいことでもあったの？」
「なんでそう思うの？」
「なんでって・・・・・・」
エリカはみほの予想外の切り替えしに、詰まった。
（やっぱりおかしいわ）
みほは、こういう時には自分から「いい事」を教えてくれるのだ。
それは、ボコの事であり、日常の些細な事であり、あんこうチームのチームメイトとの日常の事である。
だが、みほの返しはそれともまた異なった。
どことなく冷たいような、そんな返しをもらってしまったエリカは、ますます疑念が深まってゆくのを感じた。
（何かあるとしたら・・・・・・あの人しかいないわよね）
「ねえ、みほ？」
「なに、エリカさん」
「私は貴女の彼女・・・・・・そういう認識でいいのよね？」
「え、うん」

「正直に答えてほしいの・・・・・・・まほさんと、何かあった?」
「ッ!?」
ビクリ、と全身を震わせたみほ。
その視線が一瞬だが、エリカの背後にあった写真立てに注がれたのに気が付かない彼女ではない。
エリカの中の疑念が確信へと変わった瞬間であった。
「話して、みほ」
エリカの口から放たれる声は、硬い。
「え、エリカさん・・・・・・・?」
「隊長とやったこと全部、私に話して聞かせて、みほ」
「なんで・・・・・・きゃっ!」
みほを正面から抱き寄せ、抱きしめる形になるエリカ。
だが、みほにはエリカの柔らかさやシトラス系の爽やかな髪の匂いを堪能することはできなかった。
むしろ、逃げられないように拘束されたようだと、みほはそう考えてしまった。
現に、エリカがいつもみほを抱きしめる時よりも、ずっと抱きしめる力は強い。
「くっ、苦しいよ、エリカさん・・・・・・・?」
「ねえ、お願い・・・・・・隊長と、ううん、まほさんと何があったのか私に聞かせて」
みほを抱きしめ、肩口に顔をうずめている為、エリカがどんな顔をしているか彼女には解らない。
だが、この拘束から逃れるためには全てを打ち明けなければならないだろう。
みほは意を決して口を開いた。

---

「ふぅん、そんな事があったの」
「う、うん」
みほとしては、障りの部分だけ話して終わりにしたかったのだが、エリカがそれを絶対に許さなかった。

そのおかげで、みほは情事の事も含めて全てを話さなくてはならなくなり、エリカはそれを正面から聞くことになった。
みほはまほとの情事を話している最中に、少しずつ艶やかになっていったようにエリカは思った。
「それで、お姉ちゃん、ううん、まほと私は結ばれたの・・・・・・かな、えへへ」
「・・・・・・ああ、そう」
話せば話すほどに上機嫌になってゆくみほと、聞けば聞くほどに不機嫌になってゆくエリカ。
ここに不運な第三者が居れば、両者の対比は部屋の温度にまで影響を与えている様に見えてしまうだろう程、両者の感情は異なっていた。
みほの喜色満面の笑みに対して、エリカは顔を下げている。
エリカの纏う雰囲気が、剣呑なものに変わっていることに、みほは気が付かない。
「あ、そうだ・・・・・・まほから貰った珈琲があったんだ、ちょっと淹れてくるね」
みほがそう言って立ち上がり後ろを向いたその時。
「待ちなさい、みほ」
「ふぇっ!?」
エリカは、みほを後ろから抱きしめた。
後ろからみほを抱きしめたエリカは、そのままみほの部屋着に手を這わせる。
「んっ、エリカ、さん・・・・・・・あっ、何を、ンッ」
「黙りなさい」
部屋着の上からみほの胸をわしづかみにすると、そのまま揉みしだき始める。
その唇は、みほの細い首筋に落とされており、点々と赤い跡がついた。
「あっ、ああ、んぅっ」
「聞かせなさいよ、貴女の喘ぎ声」

胸だけ責められ続け、みほの口から甘い嬌声が漏れ始める。
それを何とか押しとどめようというのか、みほは右手の親指を噛みしめた。
だが、そんな事をエリカが許すはずも無く、右手はやんわりと、だが力強くみほの口から引き抜かれた。
「あっ、あんっ、まっ、まって、エリカさ、これやめ、うぅっ」
「・・・・・・」
エリカは何も答えない。
ただひたすらに、みほの胸を攻め続け、首筋に赤い印を堕とし続けるだけであった。
「こっちを見なさい、みほ」
「はっ、はいぃ」
ふらふらになったみほに、エリカの言葉に逆らうという選択肢はなく、エリカの言う通りに彼女の正面に向き直る。
そして、みほは見た。
エリカの顔が嫉妬に歪んでいるのを、そして、その瞳の中に嫉妬以外の感情が多分に含まれているのも。
「んむっ」
「ふぅっ!?」
何も言わず、みほの唇を奪うエリカ。
舌で唇を撫ぜ、歯と歯茎にも舌を這わせ、ディープキスをしようとしている。
そんな時、みほの視界にまほと一緒に取った記念写真が目に入った。
せめてまほと一緒に撮った写真を倒そうというのだろう、必死にみほは写真立てに手を伸ばす。
それが面白くなくて、悔しくて、エリカはより強くみほの体を抱きしめ、犯すようなディープキスをした。
「んんっ」
「んぷっ!?」
くちゅ、くちゃ、と唾液と舌が絡まる音が響き渡る。

みほが伸ばした手が、徐々に力を失ってゆく。
手を伸ばすことが出来なくなった時、エリカはみほにディープキスをすることを止めた。
ぐったりとしているみほに対して、エリカは告げる。
「みほ、服を脱ぎなさい」
「えっ・・・・・・な、なん」
「なんで、とは言わせないわ」
みほは見た、エリカの瞳に炎のように燃える嫉妬と情欲の感情を見てしまった。
こうなったエリカは、もう止まる事は無い。
震える手つきで、みほは部屋着に手をかけた。
「濡れてくれているのね・・・・・・それともこういう風にされるのも好きなのかしら？」
「ち、ちがうもん！」
「ま、そこについては、貴女の体に直接聞かせてもらうわ・・・・・・覚悟なさい、今日一日貴女を休ませてなんかあげないわ」
「ひっ!?」
ベッドの上に組み敷かれ、ディープキスの余韻で抵抗できないみほを、エリカはなぶってゆく。
それが、まほに対する嫉妬からくるものだと、エリカは解っていても止めることが出来なかった。
そしてみほも、彼女の行為がまほへの嫉妬からくるものだと解ってしまった。
故に、みほは彼女の行為を止めることが出来なかった。
「ねえ、みほっ」
「は、はっ、はえっ？」
「まほさんと私、どっちがいい？」
「えぁ・・・・・・」
「ふふっ、そう、そうなのね・・・・・・そうやって貴女ははぐらかすのね」
「ひあぁぁぁっ!?」

みほはエリカの手により嬌声を上げ続け、そして、果て続けた。
エリカは彼女の宣言した通り、みほを一度も休ませる事は無く。
みほはただ、エリカの行為によって達し続けるしかなかった。
「ひゅう、ひゅう、エリカしゃん、ひゅう、もう、ゆるひて・・・・・」
「あら、まだ話す余裕があったのね」
「ひぃん!?」

「貴女の心も、体も、私のものにしたい・・・・・隊長、いえまほさんにも譲るつもりは全くないの」
達し続け、そしてついには意識を手放したみほ。
そんな彼女の髪を優しく撫でながら、エリカはその心情を吐露する。
「負けませんよ、まほさん・・・・・貴女には絶対に」
エリカのその目には、決意の光が宿っていた。

姉と友人を攻略しちゃったみほちゃんの話、終

「・・・・・・」
「・・・・・・・」
むすっとした顔でそっぽを向いているみほの前で、まほとエリカはそろって正座していた。
みほの「私怒ってます」という雰囲気に呑まれたのか、まほとエリカは何も言えない。
それだけではなく、その体からは何かオーラのような物が立ち上っている様に二人には見えた。
（おい、エリカ）
（何ですか、隊長）
（みほがああなると長いぞ）
（・・・・・・怒りを納めさせる方法は？）
（ボコのぬいぐるみを買って与える、とかか？）
（知らないんですか!?　姉妹でしょうに！）
（あそこまで怒っているのは見た事ないんだ、しょうがないだろう！）
そう言うと、まほとエリカはそろって肩を落とした。
みほはボコの大きなぬいぐるみを抱えてそっぽを向き続けている。
その姿は、みほに惚れ込んでしまっている二人からすれば大変に愛おしい姿ではあるのだが。
「あの、みほ？　黙っていられると私達どうすることも出来ないんだけど？」
「そ、そうだ。　私達に何か不満でもあったか？　なら遠慮なく言ってくれていいんだぞ？」
「・・・・・・ホントに？」
エリカとまほの言葉に、ピクリと反応して返すみほ。
正面に向き直って二人の顔をじっと見つめるみほの目には、ありありと怒りの感情が見て取れる。
余り怒らないみほの怒りの感情を身に受け、気持ちで後ずさる二人。

そんな二人をしり目に、みほは自身の怒りを二人にぶつける為に口を開いた。
ケース1、西住まほの場合
「ひゃっ!? お姉ちゃん、何をっ!?」
「みほ、今はまほと呼べ」
「あんっ!?」
まほはみほの服に手を入れ、たわわに実ってきた胸を揉んでいた。
それだけではなく、首筋には甘噛みを行いみほの感度を高めてゆく。
学園艦の寄港地が重なった土曜日の事、いつものようにまほはみほの元に訪れていた。
そして、みほを抱くための下準備に取り掛かっていたのである。
「待って、まほっ! このままだと危ないからっ!」
「ん、それもそうか」
みほの胸を揉みしだく手を止めずに、甘噛みを止めたまほ。
視線の先には、包丁とジャガイモやニンジン等の材料そしてカレールーがある。
みほが、まほの為にカレーを作ろうとしていたことは誰の目から見ても明らかな事であった。
「なんで、んっ、そんなに我慢が出来なくなっちゃったの?」
「すまん、みほのエプロン姿を見ていたらつい、ムラムラと来てしまってな・・・・・」
材料を切ることを諦めたみほは、ソファに戻るとまほに後ろから抱きしめられるような形で座った。
座ったと同時に、まほはそんな彼女の胸を弄び始める。
「ん、はっ、あぁっ、まほぉ、やめっ、お姉ちゃ」
「今は、まほと呼べと言っただろう?」
こんなみほには、お仕置きが必要だな。
そう言ってまほは、みほの胸だけではなく、下にまで手を伸ばした。
「ひぁあっ!?」
「ほう、みほの感度は良好なようだな」

「待ってお姉ちゃん、そこはっ!?」
「いや、駄目だ・・・・・・可愛すぎるみほがいけない」
そう言ってまほはみほのスカートの中に手を入れ――――――。
「まほ、はぁ、はぁ、流石にもう、止めよ、ね、ご飯作れなんぷっ!?」
「ん、ぷはぁっ・・・・・・いや、いい。　それよりも一秒でも長くみほを味わいたい」
「ふぐっ、ん、ぷぁっ」
「どうしたみほ、私の指をそんなにしゃぶって・・・・・・もう我慢が出来ないか?」
(早く、早く終わって・・・・・・あうう)
「・・・・・・そう簡単には終わらせないさ、みほ」
「んむぅっ!?」
みほはこの後、まほの手により１０回の絶頂を迎えることになった。
「・・・・・・次の日、体が全然動かなくて大変だったんだよ?」
「隊長、流石にやり過ぎじゃありませんか?」
「・・・・・・そうか?」
「そうか、じゃなくてそうなの!」
みほから、まほとの一部始終を聞いたエリカは、呆れたようにまほに意見する。
そんなエリカの言葉に、みほも勢いよく同意した。
要するに、学園艦が寄港した日、ほぼすべての頻度でまほはみほを抱く。
ただ、その回数が多くみほは絶頂しっぱなしにされてしまう為、体力が持たないという事であった。
「だがなエリカ、みほを抱いたお前ならわかると思うが」
「何でしょうか?」
「一度抱くともう病みつきだぞ、みほは」
「まあ、それには同意しますが」
「そんな同意しないでッ!」
まほの言葉に頷くエリカ。

そんな二人に対して、みほは持っていたボコを投げつけた。
もっとも、二人には容易く受け止められてしまったが。
「みほ、いきなりぬいぐるみを投げつけるものではないわ」
「そうよ、危ないじゃない」
「うぅ、納得がいかない・・・・・・」
正論を述べてくる二人に、みほは唸る。
そんなみほを横目に、エリカがまほに対して口を開く。
「とは言え、そんなにもみほを求めすぎるのであれば、いっそみほ断ちをしてみるのもいいのではないでしょうか？」
「そんな事が出来ると思っているのか？」
「出来るとか出来ないじゃなくて、やるしかないでしょう」
「それじゃあエリカさんも私断ちして！」
「・・・・・・えっ!?」
いきなり割り込んできたみほの言葉に半ばショックを受けたエリカ。
（こんなに強く主張するなんてよっぽどなのね）
（私そんなに強引にやった覚えは・・・・・・あるわ）
まほはみほの言葉に目を丸くして驚き、エリカは顔を青くして天を仰いだ。
そんな二人を無視するかのように、みほはエリカとの行為に関して口を開いた。
ケース２、逸見エリカの場合
次期隊長に就任したエリカは、よくみほの元を訪ねるようになった。
エリカ自身誰かに次期隊長としての不安を打ち明けたかったのだ。
みほ自身もそれについては何ら拒否する事は無い。
むしろオープンですらあった。
過去のわだかまりが解かれ、かつての友人とまたよりを戻すことが出来たのだ、みほの心中はとても穏やかだ。
エリカにとっても、なんだか黒森峰で同室だった頃を思い出して照れくさくなってしまう。

あの時とは居場所も立場も違うというのに。
そんなみほだが、困ったことがある。
それは、エリカが来ると決まって行為に及んでしまうという事。
「ね、エリカさん・・・・・・キスマーク付けるのもう止めよ、ね？」
「・・・・・・嫌よ、私の気が済むまで付けさせてもらうわ」
「あうぅ」
みほとエリカはお互い下着姿だった。
エリカは、みほの事をベッドに押し倒してその柔肌にキスマークを付けている真っ最中である。
「あ、あのっ」
「なによ」
「なんでそんなに不機嫌になっちゃったのか・・・・・理由が聞きたくて」
「・・・・・それは」
そう、エリカは不機嫌真っただ中にあった。
それは、みほの服を脱がしたときに見つけたキスマークが原因であった。
「みほ」
「な、なに？」
「まほさんに抱かれたでしょ」
「なっ、なんで!?」
「キスマークが残ってた」
みほの胸の近くにあったそれを付けることが出来るのは、エリカが知る限り一人しかいない。
自分が抱く前日に、別の女に抱かれていた事を知ったエリカは、嫉妬と独占欲を爆発させてしまう。
そして、今の状況になっているのである。
「あの、その、エリカさん、これは・・・・・」
「黙って」
「へうぅ」
みほの言い訳を一刀両断すると、エリカはまたみほの体にキスマー

クを付ける行為に移った。
「あら、みほ」
「ふぇ？」
「貴女感じてるの？」
「なっ!?」
「でも下が湿ってるわよ？」
「ひゃん!?」
するり、と下着に手をやるエリカ。
触って見れば、みほの下着は湿り気を帯びている。
「こんなに感じてくれて、嬉しいわ」
「・・・・・・目が笑ってないよ、エリカさん」
「ええ、そうね。　こんな姿をまほさんにも見せていたんだって思うと正直嫉妬しか湧かないわ」
「そっ、それは私のせいじゃ、んむぅっ!?」
「ちゅっ、そんな事を言う口にはお仕置きよ、みほ」
そう言うと、エリカはみほに深く口づけた。
お互いの唇と舌を貪るような、強引なキス。
流石に息が続かなくなったのか、エリカはみほから顔を離す。
その顔は、まるで獲物を喰らう肉食獣のような、そんな笑みを浮かべていた。
「悪いけど、優しくなんてできそうにないわ」
そう言うとエリカはみほの下着に手を伸ばし――――――。
その後、みほは１１回の絶頂を迎えるのであった。
「ちょっと待て、１１回もしたのかエリカ」
「ええ、そうですが何か？」
「協定違反じゃないか！」
「初めに『お互いのみほに会う時間が短い時は性行為禁止』を破ったのはまほさんでしょうが！」
「それでも『みほの負担を考えて絶頂させる回数は１０回を限度とする』という取り決めをしただろうに！」
「もう、止めて、お願いだから・・・・・・・うぅっ」

「!?」
大きな瞳に涙を浮かべながら、みほは二人を制止する。
愛しい人の涙ながらの制止の声は、ヒートアップ寸前だった二人を黙らせるのにすさまじい威力であった。
「あの、みほ?」
「ぐすっ」
「えっと、その、みほ・・・・・・ごめんね?」
「うぅ」
ボロボロと涙をこぼして泣き出してしまったみほを前にして、エリカもまほも涙を止める手段を持ち合わせていなかった。
「だって二人とも、ひっく、私の事なんかどうでもいいみたいに、抱くことだけに夢中になって、ぐすっ、それでッ・・・・・・」
「・・・・・・」
みほの言葉に茫然自失となる二人。
二人は確かにみほの事を愛しているし、その行為自体もみほへの愛情からくるものであった。
しかし、当のみほ本人がそのように考えていなければそれは独りよがりに過ぎない。
「みほ、すまない。　何ならみほをもう抱けなくなっても構わない」
「貴女が愛しい事を忘れて、ただ貪るだけだった私達の責任だもの」
重々しく口を開くまほとエリカ。
彼女達はみほに自分達の所有痕を刻みつけることに夢中になっていた事にようやく気が付いたのだ。
彼女達の言葉に、一切の嘘や偽りはない。
「違うの・・・・・・そうじゃないの」
「?」
「二人に抱かれるたびに、どんどん自分がエッチになっていくようで・・・・・・怖かったの」
「・・・・・・」
「でもね、二人に抱かれたがっている自分がいる事も本当なの」
「・・・・・・」

だから、ね。
今夜は優しくしてほしいな。
先程の泣き顔から一転、顔を羞恥で赤くして、しかし、期待する言葉。
だが、二人にはみほを抱くことへの戸惑いがあった。
もし、彼女を傷つけてしまったら。
もし、彼女をまた泣かせてしまったら。
もし・・・・・・彼女の体にまた歯止めが利かなくなったら。
「みほ、そう言ってくれるのは嬉しいが・・・・・・」
「そうよ、私達・・・・・・歯止めが利かなくなるかもしれないわよ？」
「大丈夫だよ、二人なら・・・・・・ううん、二人だからこそかな」
「？」
なぞかけのようなみほの言葉に不思議がる二人。
そんな二人に、みほは笑いかけながら言った。
「二人になら、滅茶苦茶にされてもいいって思っちゃったの」
だからお願い、私を滅茶苦茶にして。
みほの言葉にまほもエリカも覚悟を決めた表情になる。
「約束するよ、みほ・・・・・・絶対に優しくする」
そう言うとまほは、みほの上着に改めて手をかけた。
「もし辛かったらきちんと言いなさいよ」
エリカはそう言いながら、みほの下着に手をかける。
「いいよ・・・・・・きて、二人とも」
みほの表情は、泣き顔から一転、どこまでも淫靡な表情になっていた。
服装を全て脱がした後、露わになったみほの体に息を呑むまほとエリカ。
何度も抱いた体だというのに、どうしてこうも美しいのか、と二人は同じことを考えていた。

---

全てが終わった後、みほ、まほ、エリカは三人で眠っていた。
ベッドには三人入らない為、床に布団を敷いて寝ている。

行為に及び、疲れ切ったのか泥のように眠るみほ。
それに対して、まほとエリカは幾分以上の余裕があった。
「みほ・・・・・本当は私達が堕とされるはずだったんだがな」
「まほさん、またあの本の話ですか？」
「いや、なに、あの本がすべての始まりだっただろう？」
「まあ、そうですが」
だが今や、とまほはみほの髪を撫でながら続ける。
「堕とされたのはみほの方・・・・・そんな気がするんだ」
「私達が堕とす側に、ですか」
話を合わせながら、みほのお腹をさするエリカ。
片方の手はみほが握っており、二人は空いた手でみほを撫でさすっている。
「んぅ・・・・・」
「あら、起こしちゃったかしら？」
「む、それはいけない」
薄目を開けて起きそうになるみほを案ずるエリカとまほ。
そんな二人の心配をよそに、みほは目を開ける。
尤も、性行為の代償か、かなり疲れているらしく視線は別の所を彷徨ってるが。
「ほら、みほ・・・・・疲れているだろう、もう少しお休み」
「そうよ、貴女はもう少し寝てなさい」
「お姉ちゃん・・・・・エリカさん・・・・・」
優しく、まるで幼子に対するように二人はみほに言う。
そんな二人に、みほは無意識のうちにほにゃりと微笑んだ。
「お姉ちゃん、エリカさん」
「どうした、みほ」
「どうしたの、みほ」
「えへへ、二人とも大好き」
「「っ!?」」
みほからの不意打ちに近い言葉に、顔を赤らめる二人。
その後、またしても眠りについたみほを見ながら、二人は顔を赤ら

めたままだ。
「エリカ」
「何でしょうか、まほさん」
「前言撤回だ、どうやら堕とされたのは我々の方らしい」
「全面的に同意させていただきます」
潜在的な主導権は、恐らくずっとみほにあるのだろう。
二人はそう思いながら、ふと瞼が重くなってきていることに気が付いた。
「エリカ、私はもう眠ろうと思うが・・・・・・・どうだ？」
「そうですね、私も疲れと眠気が・・・・・・・」
「ふふっ、おやすみエリカ」
「ええ、おやすみなさいまほさん」
挨拶を交わし、目を閉じる二人。
エリカ、みほ、まほの三人は川の字になって眠った。
「二人とも・・・・・・大好き・・・・・・・」
みほの口から、寝言が漏れる。
そんなみほの口元はふにゃりと笑っていた。